

視 察 報 告 書

報告者氏名 大塚 洋一
坂巻 儀一
渡辺 仁二

1 会派名 流政会

2 参加者 渡辺 仁二・野田 宏規・近藤 美保・大塚 洋一・石原 修治・坂巻 儀一・笠原 久恵
青野 直・森 亮二 (10月12日のみ参加) (計9名)

3 期 間

令和4年10月12日(水)～10月14日(金) 2泊3日

4 視察地及び調査事項

(1) 10月12日(水) 長崎県長崎市

「スマートビレッジ構想」について

(2) 10月13日(木) 熊本県上天草市

「水辺を利用したリノベーションまちづくり」について

(3) 10月14日(金) 熊本県人吉市

「第3セクター水辺事業の再生と復興再建、リスク管理」について

5 所感等

(1)

●視察項目 「スマートビレッジ構想について」

●主な説明者 ■株式会社アドミン 代表取締役 山口知宏 氏

■一般社団法人サイバースマートシティ創造協議会 代表理事 橋本剛 氏

●長崎市の概要 ■面積 405.86k㎡ ■人口 416,405人(令和2年10月2日現在)

■特色

・長崎市は、県の南西部に位置する。1571年に貿易港として開港し、江戸時代には出島でのオランダや中国との貿易を通じて海外文化の窓口として繁栄。その後は石炭産業や戦艦を造る一大軍事工業都市として発展。原爆被害から復興を遂げ、現在も造船が基幹産業であるほか、独自の文化や坂が多い景観、世界遺産を有し、年間700万人が訪れる観光都市になっている。

●主な内容

■視察先 琴海赤水公園キャンプ場

■ルートヴィレッジの開村について(2021年11月1日)

1. 背景

(1) 株式会社アドミン(以下「アドミン」)は、長崎市に拠点を置くIT企業として、その企業理念の根幹にSDGsを位置づけ、公益に資する事業展開を目指している。

(2) 一般社団法人サイバースマートシティ創造協議会(以下「MCSCC」:Matrix of Cyber Smart City Consortium)は、全国、新興国におけるスマートシティ(IoTの先端技術を用いて、基礎インフラと生活インフラ・サービスを効率的に管理・運営し、環境に配慮しながら、人々の生活の質を高め、継続的な経済発展を目的とした新しい都市)の創造を目的とし、アドミンを含む全国の企業・団体・学術機関等が参加している団体である。

(3) アドミンは、MCSCCと連携し、SDGsの推進の観点から、長崎市において約20万㎡の敷地にオープンノベーションのプラットフォームとしてスマートヴィレッジを整備してきた。ここでAI、IoT、ロボティクス等の新技術の開発や実証を行うこととしている。このたび、10月末で第1期の整備が完了した。

2. 概要

(1) 正式名称「ルートヴィレッジ」及びロゴマークの決定

- ・「スマートヴィレッジ」は「スマートシティ」と同様の一般名称であるが、アドミンがMCSCCと提携して取り組むスマートヴィレッジの正式名称を「ルートヴィレッジ」と決定した。
- ・「ルートヴィレッジ」の名前には、「根（root）を強く張り持続可能な世界を育もう」というメッセージが込められている。
- ・また、ロゴマークはroot（根）をモチーフとしており、下部はしっかりと張られた「根」を表現し、上部の幹、枝、葉、果実を全部足すと合わせて17となる。SDGsの17のゴール（目標）へのアプローチを暗示しており、前述の「根を強く張り持続可能な世界を育もう」というメッセージも込められている。
- ・さらに「ルートヴィレッジ」ウェブサイトを開設した。URLは <http://rootvillage.com/>

(2) 「ルートヴィレッジ」の構成

【農のエリア】

- ・スマート農業の実証実験の場。MCSCCと連携し、IoT水位計をはじめ、CO2濃度、土壌水分分布、日射量、天候情報をモニタリングし、ドローンや巡回ロボットを用いて農業従事者を支援する取組を推進する。また、広く企業・研究機関等の実証実験の受け入れも取り組む。
- ・太陽光発電ユニットやウォーターマネジメントシステムを搭載し、小型コンピュータ「ラズベリーパイゼロ」を内蔵して低コストで建築可能なIoTコテージを整備し、起業家、研究者、クリエイター、エンジニアが「ルートヴィレッジ」を拠点として活動するのを応援していく。

【森のエリア】

- ・自然を体感し共生するレクリエーションの場。また、ドローンに関し、改正航空法施行によるレベル4解禁に向けて、自動飛行におけるプログラミング技術の研究を進め、ドローン飛行の実証実験の場としていく。

【海のエリア】

（スマート水産業を含め計画中）

●所感

現在のスマートビレッジは20万㎡だが、将来的には110万㎡の広大な敷地を本拠地(①居住区：フロント、②実証フィールド、③居住区：メイン、④湖、⑤居住区：バック、⑥市街地)にするという、「計画地」を見学することができました。トヨタが静岡県裾野市で開発中の「ウーブンシティ」が約70万㎡（東京ドーム約15個分）であるのに対し、その規模の大きさに圧倒されました。

「IoTコテージ」の建設費は、1か所約50万円であり、量産する工場を110万㎡の本拠地に建設中であること。「自給自足」において、地下水の利用、スマート農業による畑で収穫するもの他、たんぱく源の「食用ココロギ」や、「ネットスーパー」も検討しているとのこと。畑や現場の機械の「盗難防止」に関しては、電気柵や防犯カメラを活用するとのこと。実際、IoTコテージ内で、「AR（シュミレーションした環境で、現実の環境を拡張したテクノロジーである拡張現実）」のゴーグルを装着し、その空間を見るといった貴重な体験をさせていただきました。

SDGsの17項目に関する「補助金」として、国、県、市等の各部署からのメニューも視野に入れているとのこと。社員の方は、それぞれの分野のエキスパートであり、基本的に会社ですべてを行う姿勢も力強く感じました。視察初日は、広大な敷地で未来に向かっての「スマートビレッジ」の「実証実験」の現場を確認させていただきました。

(2)

- 視察項目 「水辺を活用したリノベーションまちづくり」について
- 主な説明者 ■株式会社シークルーズ 代表取締役 瀬崎 公介 氏
- 上天草市の概要 ■面積 126.94 km² ■人口 26,756人（令和2年10月2日現在）

■特色

- ・上天草市は、県の西部に位置し、有明海と八代海が接する天草地域の玄関口に位置し、大矢野島、上島など複数の島々で構成される。市域の大部分で急峻な山ひだが海岸線まで迫り、全体的に平地は少ない。ほぼ全域が雲仙天草国立公園に含まれ、天草松島の風景や龍ヶ岳をはじめとする景勝地に恵まれる。年間通して温暖多雨で、

果樹や花木の栽培が盛ん。真珠も特産品。

●主な内容

■視察先 前島地区復興開発視察（ミオカミーノ天草）

■視察名目 「水辺を活用したリノベーションまちづくり事業」

●所感

当該視察地である熊本県上天草市前島エリアは現在の一大リゾート地となる事業が発足される以前は廃墟と草むらの過疎地であったと聞く。この事業の仕掛け人であり今回視察説明をしていただいた株式会社シークルーズ代表取締役の瀬崎氏は同社の創業主である父親の家業を学生時代より手伝うようになりその当時より当該地の交通アクセスの悪さを肌で感じていたという。2008年に熊本港（熊本市）と本渡港（天草市）間を運行していた高速船が赤字撤退することをきっかけにJRにも直談判し鉄道駅と航路を接続し新たな公共交通機関を創設した発想力と実行までの勇気は驚愕でありました。また、国・県・市の補助金に頼ることなく縛りの無い環境での自由な発想の元事業展開を図りながらも様々な分野においては国・県・市ともコラボしてウィンウィンの関係を保持しているように見受けられました。

更には民間業者も誘致し2015年からはカフェレストラン「リゾテラス天草」物産館「藍のあまくさ村」2019年にはシークルーズ社とバス会社・九州産交グループによる共同企業体により観光交流拠点施設「mio camino AMAKUSA」の運営も開始され、かくして当該地に一大観光スポットが築き上げられました。瀬崎氏をはじめ事業に係る経営者達は世界各国のリゾート地を訪れ施設意匠やサービスに関して研究を重ねたそうであり、落ち着いたあるお洒落な空間を創造し老若男女問わず多くの来場者から支持を得ていると感じました。

特筆すべきは各ギフトショップに並ぶお土産品が余所のどこに行っても同じような品々ではなくオリジナリティに溢れた品々を揃える為に地域産業の育成にも貢献されている点と言えよう。

また今年8月からは熊本県初となるドーム型テントを採用したグランピング施設「シークルーズグランピング熊本天草」も開業されました。私感から厳しい見方をすれば、施設内容、ユニット数、価格帯から窺うには決してリーズナブルではなく高級志向な宿泊施設ではありますが、アクセス道が狭く対向車との交差が困難でありました。アジアなどの高級宿泊施設での同様の問題では違う場所にお客様専用のモータープールを設けそこから小さな電動カートなどにより随時施設までの送迎などがなされお客様に交通トラブル等で不快な思いをさせないようなサービスがなされていますが日本国内においてはそのような取組は法的に難しいかもしれません。熊本県においては初となるドーム型テントでのグランピングであっても日本国内では既に多くの同様な施設が展開され、「グランピング」という新語がいつしか死語になりかねない流行りの要素がある事が勝手ながらに懸念されますが、現在までも様々な困難も乗り越えてきた瀬崎氏や周りのブレインの知恵と行動力をもってすればその時々での改善策も見出していられる事だと考えます。いずれにしてもこの短期間にこのようなビッグプロジェクトを立ち上げ推し進めている瀬崎氏はじめ、歩みを共にするブレイン、関連企業、市へは羨望と敬意の念が止みませんでした。許されるならば何年か後の当該地の展開をも再度視察したい気持ちが溢れました。

最後に、流山市にこのようなプロジェクトをシミュレーションし落とし込んでみると、その大自然が持つ雄大なロケーション、シチュエーションのポテンシャルの高さは、江戸川や利根運河というウォーターフロントという立地条件は同様にしても、規模が違いすぎる点はあるもののその並外れた発想力と行動力、郷土愛の強さにより物事が進んでいくという事。我々も身の丈に合ったイメージを持ちつつ地域活性への活動を展開していかねばと強く感じました。

(3)

●視察項目 「第3セクター水辺事業の再生と復興再建、リスク管理」と「商工業復興エリア視察」

●主な説明者 ■株式会社シークルーズ 代表取締役 瀬崎 公介 氏

●人吉市の概要 ■面積 210.55k㎡ ■人口 32,282人（令和2年10月2日現在）

■特色

・人吉市は、県の南部に位置し、周囲を九州山地の山々に囲まれた盆地で、市の中央部を急流で知られる球磨川が貫流する。鎌倉時代から幕末までの700年間、相良氏が治めた城下町で、現在も当時の文化や風土が色濃く残る。人吉温泉や球磨川下りなどの観光資源を持ち、観光が主要産業の1つ。稲作が盛んな米どころで、米焼酎「球磨焼酎」の蔵も所在。

●主な内容

■査察先 球磨川くんだり発船場が新たな複合施設「HASSENBA HITOYOSHI KUMAGAWA」見学

100年以上の歴史を誇る人吉球磨の観光のシンボル「球磨川くんだり」人吉発船場は令和2年7月豪雨により浸水。球磨川流域における犠牲者数は50名。浸水や家屋倒壊などで約7,400戸(棟)が被害を受けたほか、7月4日昼時点で約7,800戸が停電しました。その後令和3年からリノベーション工事を行い、「ツアーデスク」「カフェ」「ショップ」の機能を兼ね備えた観光拠点施設「HASSENBA HITOYOSHI KUMAGAWA」として令和4年7月に開業した。

豪雨災害で壊滅的な被害を受けた球磨川くんだり発船場から、復興に向け新しい人吉を「発見」「発信」し「発展」させられるランドマークとしてわずか1年で開業の運びとした。

球磨川付近の市内の状況を見てみると、長細い空き地が多々見られました。これは2020年7月に襲った豪雨災害により甚大な被害を受けた建物を解体した跡地でありました。

「球磨川くんだり」を第三セクターとして2019年から人吉市から経営権を「株式会社シークルーズ」が継承した。今までの川下り事業では、船頭や会社本意(お客が集まらなると運行しない。会社の眺めの良い2階は事務所)では集客を見込めないことを考え、新たな手法を導入し運営を開始。その1年後に豪雨災害にあい、営業などすべてできない状況に陥った。復興する間は従業員の仕事がないと食べていけないので、船頭などはサイクリングツアーガイドとして新たな稼ぎ方を得、人吉市の復興のシンボルとして、わずか1年で今まで使用した施設をリノベーションし復興を遂げた。

河川周辺の住民は、増水する河川を目の当たりにすることで早めの避難が出来て生命を守ることが出来たが、河川から少し離れた住宅は「ここまでは大丈夫だろう」と経験則で物事を考えてしまい、避難が出来なかったということである。また、水害の防災に関してはやはり限度がある。その限度をできるだけ軽減するよう減災の考えがとても大切であり、その例として垂直避難時に最終的には屋根に登って救助を求めることがあるが、水害時には雨も降っており、屋根に登るのも危険を伴う。そこで3階屋根部分を改築し、普段は眺望の良いデッキとして使用しているが、災害時は避難場所として新たに設置した良例である。

●所感

熊本県人吉市ですが、先月9月に上陸した台風14号の被害も少なく、視察の受け入れをしていただきました。球磨川を見てみると水色の綺麗な流れと感じましたが、話を聞くと通常の球磨川は川底が見られるくらいの透明度があり、今回伺った時は台風の影響が残り、濁っているということでありました。

複合施設「HASSENBA HITOYOSHI KUMAGAWA」が開業した効果として、人吉市の新たな観光施設、人が集まる複合施設にあると思います。観光客や地元の人々がこの施設を「目的地」とするためのアイデアとしてはおしゃれて美味しい「カフェ」を設置。女性客や若い人が来るような工夫としては、今では色々な施設でも導入している「フリーWi-Fi」がある。高校生や大学生などはインターネット接続が当たり前の世代となっていますので、無料で使えるWi-Fiはコストをかけずに市民の皆さんが利用できるという利点があります。次に、地元での雇用問題があり、川下りの船頭さんという職業は経験がものを言うプロフェッショナルな職であります。川下りと環境は、天候に左右されやすいもので、川の水が少なくても、多くても運行が不可能になります。運行が出来なければ給料を払うことが出来ないので新たに自転車を使ったツーリズムを開始。普段は船頭として働きながら、川の状態に左右されない自転車ツーリズムの案内人として地元の雇用を守っていることは、非常に考えてあると感じました。また、一年中働ける環境づくりにおいては、求人に対して若者の応募が多く、地元の若者の雇用を新たに創出し守っている施設です。町中が壊滅的な被害を受け、人々が復興に向けて動いていこうとする中、被害を受けた建物を残す事によって、災害を忘れないよう、しかし災害時にも対応できる新たな施設へとリノベーションがおこなわれています。

流山市も江戸川や利根運河など川に近い環境がある中、なかなか川を使ったまちづくり、地域づくりはできていない状況にあります。今後も住み続けたい流山を目指すうえで「ウォータフロント・リバーサイド」を活用した提案ができるよう、調査研究を続けていきたいです。

商工業復興エリア

■査察先 モゾカタウン

令和2年7月豪雨に被災した事業者向けの人吉駅前に広がる仮設商店街。2年後に復興を遂げ元の場所で商売ができるよう市が支援するプレハブ建設の商店街。

復興商店街「モゾカタウン」は2020年に被災した飲食店、歯科、洋服店などが人吉駅前の市所有地に展開した臨時の仮設商店街24軒が集まる場所となっており、両サイドに店舗が並び、中央の通りにはイスやテーブルが置かれ、様々のお店から食べ物、飲み物を購入してそこで楽しめる、さながらフードコートのような活気のある場づくりがおこなわれておりました。復興商店街スタート時には24件あった店舗もいくつかの店舗は復興を遂げて自らの土地で再度商売を開始されている一方、まだまだ復興できる余力がない店舗も数多くあり、本来であれば、

今年度いっぱい臨時商店街を閉鎖する予定であったが、復興商店街の声を聞き、1年間事業を延長したとのこと。

●所感

人吉市の中心市街地を歩いて回ってみると、川沿いの土地は建物は解体されているがまだまだ新たな建てられた商店などは多くありませんでした。新型コロナウイルス感染症の影響もあり、観光客の流入をまだまだ見込めないうちに、新店舗の建設は非常に難しく、行政の支えが必要であると思います。駅前的一角に地元商店を集めることによって、「モゾカタウン」が目的地になると思います。土日などは市外からも人が集まるようになってきたそうです。災害復興にはやはり時間がかかるし、一人一人の復興までの道のりの時間は全然違うことがわかりました。